

の左一番奥にある、田中家のお墓に参った。お墓の側面に父久米吉と母ヤスの名が彫られている。裏面に建立者として兄2名のお名と田中絹代と彫られている。昭和12年に田中が建てたものだ。「昨年、雨の鎌倉以来です」とお参りした。左側に小林正樹監督の名が彫られた小林家のお墓がある。田中さんとはまたいとこの名監督である。お墓を辞し、田中町の下関市立近代先人顕彰館に向かう。このクラシックな大正調の建物の2階に「田中絹代記念館」がある。年譜パネルがあり、絹代さんの生涯のショート・ビデオも流されている。奥には出演された数々の名作のパネルがあり、1000点に及ぶ遺品も展示されている。赤漆衣装箆笥、金箔の蝙蝠の吉祥紋が施されている。ガラスケースの中に田中さんが使用された緑のハンドバッグが飾られている。よほど愛用されたのであろう、皮がくたくたで味わい深い。名誉館長の古川薫先生（『漂泊者のアリア』で第104回直木賞受賞）とお会いできる僥倖を得た。もう85歳におなりになられるが、矍鑠とされていて、黒縁眼鏡の向うの目は鋭く、それでいて優しい。1時間ほど、お話しをさせて頂いた。一番好きな映画をお聞きすると、即座に、「サンダカン八番娼館望郷です。栗原小巻さんとの別れのシーン、お金の代わりに手ぬぐいをくれという、栗原か



右) 革の波打ちかげんにも人生が宿る絹代愛用のハンドバッグ。左) 下関中央霊園にある墓所に参る筆者。



らもらった手ぬぐいを抱きしめ、嗚咽する演技は女優人生のすべてが凝縮されていた。この映画から2年後に彼女は他界するのですよ」と、教わった。「お兄さんの兵役忌避があり、国賊のごとくに一家は下関を追われた。このぶんか館は田中絹代さんへの下関の贖罪です」と静かに慈しむように語られた。

私は彼女が幼い頃暮らした丸山町界隈を拝見し、彼女が1年生の1学期まで通った下関市立王江小学校にお邪魔した。建物は当時のままと聞く。高台の校庭に立ち、眼前に広がる関門海峡を見つめた。彼女も、きっと大阪へ行く前に、寂しい思いで見つめたであろう。ふと気配を感じ、振り向くと、6歳くらいの頑是無い、ほっぺが下ぶくれのお嬢ちゃんが、同じように海峡を見つめていた。



下関市立近代先人顕彰館
田中絹代ぶんか館

下関市田中町5-7
☎083-250-7666
9時30分～17時(入館は16時30分まで)
月曜(祝日の場合は翌日)休館、
年末年始は12月28日～1月4日休館
入館料200円(2階の田中絹代記念館のみ有料)